二松學舍大学21世紀COEプログラム

「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」

雙松通訊

発刊によせて

二松學舍大学 学長　石川 忠久

研究拠点の構築に向けて

統括責任者 佐藤　保

21世紀COEプログラムの開始にあたって

拠点リーダー 高山 節也

Newsletter
SOSHOTSUJIN
創刊號

目次

1 発刊によせて

二松學舍大学 学長　石川 忠久

2 研究拠点の構築に向けて

統括責任者　佐藤 保

3 21世紀COEプログラムの開始にあたって

拠点リーダー　高山 節也

4 上代・中古漢文班

『上代・中古漢文』の諸本調査と校本・目録作成

主　任：白藤 禮幸

担当者：山崎 正伸・吉原 浩人・谷本 玲大

5 中世漢文班

日本漢文と礼楽文献

主　任：磯 水絵

担当者：田中 幸江

6 近世近代漢文班

漢文学　江戸から現代へ

主　任：町 泉寿郎

担当者：横須賀 司久・大島 晃・山辺 進

7 朝鮮漢文班

朝鮮漢学と日芳

主　任：小川 晴久

担当者：渡邊 了好

8 漢文教育班

漢文教材の変遷と大学教育

主　任：青木 五郎

担当者：小川 晴久・吉崎 一衛・山辺 進

9 日中文化交流班

日本漢文と日中文化交流

主　任：佐藤 一樹

担当者：王 宝平・竹下 悦子

10 書誌学目録データ班

日本漢文文献と情報

主　任：高山 節也

担当者：町 泉寿郎・谷本 玲大

11 研究員研究テーマ

12
- 「日本における仏典の伝入と出版に関する研究」
  COE研究員：會谷 佳光
- 伊藤鹿里旧蔵漢学資料の整理と研究
  —大田錦城未刊資料を中心として—
  COE研究員：清水 信子

13 研究担当者等

- 研究担当者
- 客員研究員
- COE研究員
- COE研究助手
- 学外研究協力者

14 寄贈資料一覧

15
- 一般書籍
- 目録
- 紀要
- 報告書
- 雑誌その他

16 活動・会議一覧

- 講演会
- 現地調査
- 諸会議

17 和刻本古文真宝書影集1

- 編集後記

発刊によせて

二松學舍大学 学長
石川 忠久

このたび、「二十一世紀COEプログラム」に採択されたことは、二松学舎始まって以来の快挙と言ってよい。採択されたテーマが、「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」というのであるから、凄いことである。

一割に満たない倍率もさることながら、このテーマによる採択であるのが、特に意義深い。よくぞ通った、というのが偽らざる感想である。これ偏に二松学舎の伝統の底力による、と同時に、時代の趨勢のしからしむるところでもあろう。

十年前だったら、おそらく、“鼻もひっかけられない”テーマではなかったか。時代がそれだけ急速に動いたのである。採択理由に曰く、「漢文は、日本文学の中心軸であったにもかかわらず、戦後は疎んじられ、衰退しきっている。二松学舎大学はこの趨勢の中で、漢文を堅持している希少な大学である」（節録）と。

戦後六十年近く経って、ようやく公の立場からこのような発言が起こったことに、感慨無きを得ない。日本文化の正しい伝統を受け継ぐ旗手として、二松学舎は重い責務を負ったのである。五年間、学舎の総力を傾け、プログラムを遂行し、立派な成果を挙げなければならない。

幸い、充実したスタッフを組織することができ、この八月以来、国際シンポジウムに、講演会に、海外・国内調査にと、順調にすべり出している。まずは、来年の中間審査に向けて万全を期したいものである。

終わりに、蕪詩一首を添えて結びとする。

偶感

蓬莱文運委衰亡　　蓬莱の文運衰亡に委し
劫後人皆愛餼羊　　劫後人は皆餼羊を愛しむ
嬴得松林徳音誉　　嬴ち得たり松林徳音の誉
巋然今世魯霊光　　巋然たり今世の魯の霊光

研究拠点の構築に向けて

統括責任者 佐藤 保

本学の21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」が対象とする「日本漢文学」が、「漢詩漢文」といわれる通常は文学・思想ジャンルに属する著述だけにとどまらず、ひろく日本人の手になる漢文スタイルの著述全般をさすことは、これまで繰り返し述べているところである。この「漢文スタイル」という中には、中国人の著述を解読するために日本人が独自に工夫した訓読法をも含むので、訓点を施した中国書（漢籍）はもとより、訓読読み下しの抄物類なども日本漢文学研究の対象からはずせない。

すなわち、明治以前の日本にあっては、学問や芸術、あるいは卑俗な芸能や日常的な実用書の類に至るまで、文化・文明のすべてを支えて来たのはまさしく日本漢文であり、日本漢文学研究の間口の広さと奥行きの深さは尋常一様ではない。我々のプログラムは、これまで日本学と中国学の狭間でやや扱いにくい厄介な存在であった日本漢文について、あらたに中国学・日本学・朝鮮学の角度から総合的な検討を行うことを目的として発足し、そして、この巨大な日本漢文学研究の世界的な研究拠点を創りあげるために、まずは四つの柱を立てて活動を開始した。つまり、

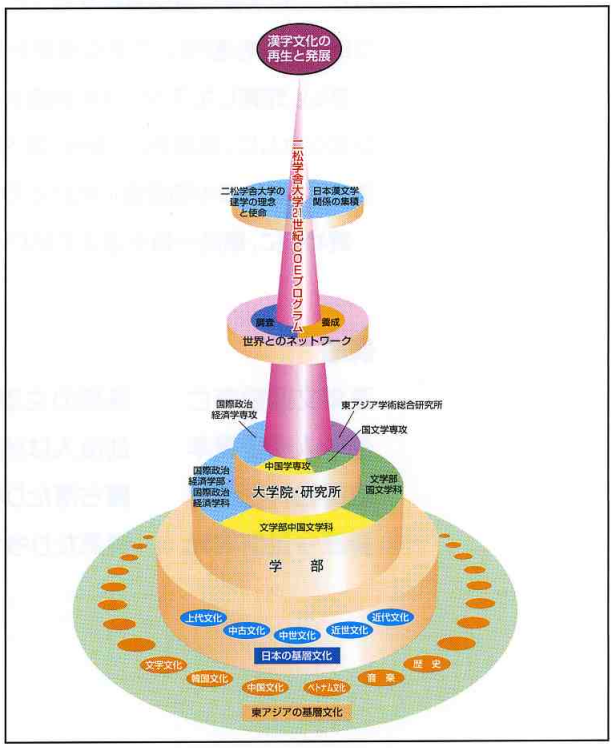
①日本漢文文献の所在調査とそのデータベースの作成、
②研究者交流のネットワークづくり、
③若手研究者と書誌的調査の専門家の養成、
④漢文教育の研究と振興

がそれである。①②はいずれも世界規模での実行が前提であり、③④も本学のみに限らないオープン・システムで事業を推進している。

しかしながら、この四つの柱だけで日本漢文学研究の世界的な拠点を作り上げるのに十分であるとは、決して考えていない。例えば、当然のこととして特に柱としてはあげなかった研究文献目録と研究者リストの作成は、やはり世界的規模で行われなければならないし、また、漢文文献のデータベースづくりは、たといいくら努力しても我々の力だけでは限界が明らかであるので、外部の図書館・研究所等のデータベースとのリンクが拠点形成の成否を分けるだろう。

前途は決して容易ではないが、本プログラムが終了する4年後には、本学を拠点とする日本漢文学研究の世界的な機構ないしは国際学会のような組織ができあがっているのが私の夢であり、本学内に日本漢文学の学習と研究に特化した学科・専攻が設置され、研究者・専門家の養成が積極的且つ効果的に進められることが望ましいと、あれこれ可能性を思案中である。

さらに言えば、日本語の津波tsunamiが国際語になったように、日本漢文を意味するkambun（通常のkanbunよりこの表現の方がベター）が国際語として認知され、ひろく世界に通用するようになってほしいもの、と思っている。



21世紀COEプログラムの開始にあたって

拠点リーダー 高山 節也

平成16年7月、二松学舎大学COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」が採択された。日本漢文学が日本文化の根幹に関わるものであるだけに、本学にとってはもとより、我が国の漢文学にかかわる研究者・教育者、さらには日本文化関連の多種多様な方面にとっても誠に喜ばしいことと思う。現在まず今後5年間の研究と調査や情報発信の体制と、その実績の充実した蓄積のための基盤整備に取り組んでいる。

本COEプログラムでは、おおむね四種の事業を基幹として計画している。

一つは、日本漢文学関連文献の所在調査と、そのデータベース化である。これは本プログラムの基幹事業のうちでも最も中心となる事業であり、世界的レベルで関連研究に従事する研究者の調査研究上のニーズに応える事業である。日本漢文学関連文献として、我々は以下の三種の文献を想定している。

1 日本漢文 日本人による漢文表記された文献 古くは日本書紀・懐風藻あるいは和製仏典などから江戸期漢学者による詩文などまで

2 和刻本漢籍 日本で出版された漢籍 日本人による訓点や頭注などが付加されたものも含む

3 準漢籍 日本人の手による漢籍の再編本や日本人の漢籍注釈書など

これらを日本国内はもとより、海外における収蔵資料までも網羅した文献目録としてデータベースに蓄積し、本学データベースにアクセスすれば必要な日本漢文関連文献資料の基本的情報を得られる体制をつくることが目的である。

二つは、日本漢文学関連の研究者ネットワークを世界的規模で構築することである。東アジアはもちろんのこととして、欧米にもこれらの研究者が広く存在している現状にあって、互いに情報交換あるいは研究交流を実施し、当該研究のより充実した発展を達成するための拠点となることを目指すことである。

三つは、日本漢文の表記そのものである漢文訓読技能の向上を図ることである。このことは、我が国近年における学生の漢文離れと、それと関連して必然的に起こる漢文読解能力の著しい低下という現状が、我が国独自の文化的基盤に対する認識を欠落させ、その結果として世界における日本文化のアイデンティティー喪失という結果を招来させかねないという深刻な認識によるのである。

四つは、漢籍をも含めて漢文表記文献を書誌学的に扱う技能者の養成である。このことは、現状における図書館司書の養成が、ほとんど漢文表記文献の整理・目録法などを圏外において実施されているのであり、その結果として漢籍はもちろん、和刻本漢籍や準漢籍の整理技能が欠落し、大量の旧来からのこれらの文献が放置あるいは未整理として死蔵される状況にあることの認識にたって、これらの状況を打破するための方策として計画されている。

この四本の柱に基づいて、おおむね九種の班に分かれて目標達成のための研究・調査活動、あるいは資料収集活動を展開する予定であり、すでに活動をはじめている。これらの班には、資料収集や情報調査ではなく、具体的日本漢文関連文献を研究対象として活動している班もあるが、これらが資料整備や情報収集の成果をいかに活用して、当該文献研究の実質的深化と広域にわたる研究協力の成果を実現するか、本COEプログラムの成果として大いに期待されるものであると同時に、きわめて重い任務を負うものともいえよう。

上代・中古漢文班

主任：白藤 禮幸
担当者：山崎 正伸・吉原 浩人・谷本 玲大

我が国における漢字文化伝来からその定着時期へのアプローチとして、上代中古時期における漢字漢文文献の網羅的リスト作成や、個別研究としての「新撰万葉集」研究と異体字校本の作成、大江匡房・永観の著作への漢文学的知見に基づく注釈作成など。

『上代・中古漢文』の諸本調査と校本・目録作成

上代・中古を合わせて古代と呼べば、この時代は漢字漢文文化の伝来し試行・学習され熟成してゆく、草創・完成の時期を含む。その間に多くの典籍が将来され、その学習・読解の理解活動を経て、日本人も漢字を用いた、文字による表現の道を獲得した。我々の本プロジェクトにおける基本的な作業として、この時期の、わが国で作られた漢字漢文文献の網羅的なリスト作成がある。現存する該当文献を群書類従・国史大系・大日本古文書・史料大成・日本大蔵経・大正新修大蔵経・大日本仏教全書・国文学全集などの叢書・全集などから漢文体のものの文献名を抜き出すことから始めて、文中に引かれる佚書名の調査も基礎的作業として計画している。

この漢字漢文文献名のリストとその所在情報が結び付けられ、更にその文献の研究情報を知ることができるようなシステムが構築されることを目標とする。（白藤禮幸）

そのようにしてリストアップされた個々の史料については多様な研究がそれぞれの立場でなされるであろうが、当班の計画としては次の二点の個別的研究がある。

1、『新撰万葉集』の諸本調査と校本作成

『新撰万葉集』の本文に対する文献批判とその成果としての総合的研究は、あまり進捗していない。この校本には、既に浅見徹氏・木下正俊氏の共編になる『新撰万葉集校本篇』（1981）あるが、該本は稀覯本に属し、入手困難である。また、寛文七年版本を底本にし、諸本の異動を正字に統一している。契沖校訂の元禄版本、並びに文化版本では、多くの独特の異体字を本文に持つ。そして、流布本に属する諸本の相互関係や距離の検討にも、異体字をも区別した諸本のありさまを基礎にしないと、本文の研究としては、困難な側面を持つ。

今回、このCOEプログラムで、異体字をも区別した諸本対照校本の作成を行い、適切な本文を、印刷媒体のみならず電子データによっても提供することと、この本文を使用して、漢字文化接取の一形態であるところの万葉仮名使用に関わる諸問題、漢詩表現などに迫ってみたい。

まずは、諸本対照校本の作成に当たって、第一年度の平成十六年度と、第二年度の平成十七年度は、京都大学本、天理大学図書館本、大阪私立大学本を初めとした諸所の所蔵本の調査と、それぞれの本文を用いて、異体字レベルまで視野に入れた校本を作成することを予定している。（山崎正伸・谷本玲大）

2、大江匡房・永観の研究-一文人と僧侶の院政期漢文学

本研究では、大江匡房（1044～1111）及び永観（1032～1111）の著作に、日本漢文学の知見を生かした註釈をつけることを目指す。

大江匡房、後三条朝から白河院政期にかけて活躍した学僧・経世家であり、各方面に亙って多彩な活動を繰り広げた。その著作は多岐にわたるが、未だ全集は刊行されていない。そのため、『江都督納言願文集』『本朝続分枠』『朝野群載』『本朝文集』など所載の身註釈作品のいくつかについて、本文校訂・読み下し・現代語訳・構造分析・註釈・解説・文献一覧からなる、詳細な註釈作成を行う。

また院政期、南都永観の浄土教は、摂関記の源信と鎌倉期の法然を繋ぐ架橋的存在と評されてきたが、院政期には独自の浄土教研究が発達していた。これまで、永観など僧侶の著述は仏教学の分野で、大江匡房ら文人貴族の著作は国文学や日本史の分野で研究され、相互の領域を見渡した総合的研究がなされてこなかった。しかし、両者は全く同時代を生きており、しかも僧侶と貴族社会は相互に交流があることから、両者の関連を考えながら、総合的に院政期の浄土教思想研究を行うべきと考える。永観の著作には、『往生拾因』『往生講式』『三時念仏観門式』があり、永観の全作品に詳細な註釈を作成する。その際、日本漢文学の見地から、文章構造や外典の出典研究等にも特色を持ったものとする。

（吉原浩人）

中世漢文班

主任：磯 水絵

担当者：田中 幸江

院政期礼楽は、中国の礼楽思想に基づく日本漢文資料の豊富な分野であり、礼楽復興者である藤原通憲に関する資料調査、最古の総合的音楽書「教訓抄」の年表と索引作成、唱導・舞絵などの研究、および我が国音楽資料の豊富な上野学園日本音楽資料室の文献調査等を実施する。

日本漢文と礼楽文献

漢文（漢字）で書かれた文献や「漢字資料」、たとえば文字譜を有する音楽文献を筆頭に、各分野の資料を視界に収めると、中世はそれの宝庫ということができる。

平安時代紀伝道における「知」の蓄積は、中世に『作文大体』『明文抄』『文凰抄』等の作文手引書を生み、表白・願文・説経等の唱導分野に流入した。これら緇素にわたる漢文活用の拡大は王朝漢文学の一到達点であり、中世の特徴とも言えよう。鎌倉前期は文化史面においては日本音楽文献制作の黄金期であり、わが国最古の総合的楽書『教訓抄』を筆頭に楽書や楽譜が多数著されたが、それらは仏教音楽関係資料以下、多くは漢字・漢文で表記されていた。従来、楽書への言及はなかったといってよかろうが、「漢字文献」として音楽資料を対象にする文献学的研究は今後の課題である。

そこで本班は、第一に諸道諸学に通じた院政期の傑物、藤原通憲（信西）に着目した研究を試みる。通憲は『本朝世紀』『法曹類林』『日本紀抄』等を著した学者で、後白河院近臣として院政に関与、国史編纂を企て、「内宴」復興を実行した。その豊かな学識と故実に照らした活動を支えたのは、漢籍・楽書を包括した膨大な蔵書であったはずだが、近年『信西入道蔵書目録』が否定され、通憲の知識の源泉はわからなくなっている。また、彼は南家藤原貞嗣流出身で、後には俊憲や安居院唱導の祖澄憲、その息聖覚等、中世文化研究に欠かせない巨人達が連なる。「知」の伝承が中世唱導に継承される軌跡を考える上に通憲の影響は大きい。通憲の仏教関係作品を読み解き次世代との関係を考究しなければならない。音楽活動の研究も含め、未だ菅原道真や大江匡房、同時代の藤原頼長ほどに知られていない彼の学問の全貌、蔵書等を明らかにしていきたい。

次に狛近真の『教訓抄』を取り上げる。本書は豊富な実演記事を有することから歴史家にも注目されているが、未開拓分野だという現状を踏まえ、基礎的研究として本年度は『教訓抄』に引かれる中国文献の研究、歴史資料という側面からの編年年表、曲名索引の作成を行なう。最終的には他楽書を含めて礼楽の形成と継承について考究していきたい。

また、わが国で唯一日本音楽資料を蒐集、研究を進める上野学園日本音楽資料室の蔵書中、主に漢字表記資料を対象に目録作成を行なう。本資料室には膨大な資料が所蔵されながら、目録が完備しない憾みがあった。蔵書調査・目録作成は音楽分野よりも、国史・国文分野において広く待たれるところである。

近世近代漢文班

主任：町 泉寿郎
担当者：横須賀 司久・大島 晃・山辺 進

伝存漢文資料の最多の近世における文献成立に関する書誌学的考究と、歴史あるいは思想史レベルの江戸明治の漢学研究、さらにはその後を継ぐ明治後半期から昭和初期に及ぶ漢文学の基礎研究など。

漢文学　江戸から現代へ

近世・近代は伝存する漢文資料の多い時代であり、未着手の研究対象も甚だ多く、また本事業が対象とする文献の多くと関わりがある。我々の研究班ではA班〔大島晃〕がおもに江戸前期を中心とし、B班〔町泉寿郎・横須賀司久・ロバート　キャンベル〕が江戸中・後期および明治初期を対象とし、C班〔山辺進〕が明治後期（～それ以後）を対象として研究を進めてゆく。各担当者の研究概要は次の通りである。

A班 1.江戸時代における和刻本とその祖本の研究

和刻本の底本を検証しながら、渡来漢籍を遡及し、その祖版を考えることは、和刻本の質とその役割を検討する上で、最も基本的事項となる。朝鮮本も含まれることは言うまでもない。当時の学界と出版の状況をふまえて、江戸時代を三期（Ⅰ戦国末・江戸初、Ⅱ元禄～寛政、Ⅲ寛政～幕末）に分けてみることにし、当面、第Ⅰ期を中心とするが、第Ⅱ期Ⅲ第」期を見渡しに入れた検討が必要である。

2.江戸時代における漢籍の出版と考訂・校勘の学

和刻本の刊行と使用における、考訂・校訂・校合と校勘の要素を検証したい。我が国で校勘の学がどのように形成されていくかは、学術の展開を考える上でも、重要な問題である。

3.江戸前期における漢籍の注釈

とくに「諺解」「俚諺抄」「首書」「鼇頭」「標柱」と称した注釈書の有り様を明らかにし、その学的水準と質を考察し、注釈史における評価を試みたい。従来、啓蒙書・一般書と一括されることが多いが、その学的水準と質を考察し、注釈史における評価を試みたい。

B班 1.漢学における江戸と明治の接点に関する研究

明治前半期において、漢学（前近代の日本人が漢文習得によって身に付けた学術・技芸の意）は、如何なる意義を持つものであっただろうか。中国から西洋への舵の切り替えは早く江戸後期に始まり、明治は江戸と政治史的な断絶では律しえない種々の接点を殊にその前半期にもつ。その多様な接点を、漢学に着目することにより、とりわけ洋学導入の中心地たる東京大学において漢学が担った意義を、同時代における漢学の意義の典型と位置付けて、考察する。具体的には東京大学文学部（明治10～19）に漢学を講じた人々（中村敬宇・島田篁村・三島中洲・川田甕江・重野成斎・南摩羽峰・内藤耻叟・信夫恕軒・岡松甕谷ら）の研究教育実態を明らかにする。さらに各人の学系を、江戸後期の漢学に溯上することと、東京大学古典講習科の卒業生などに下ることを通して、学的な継承と断絶を具体化し、江戸と明治の接点における漢学の意義を特化する。

2.江戸・明治漢詩文集の目録作成

江戸～明治期に製作された日本人による漢詩文集は膨大な数に上ると見られ、いまだその概数すら把握されていない。そのための基礎作業として、この分野における主要コレクション（国会図書館鶚軒文庫、大東文化大学市川任三文庫、中野三敏氏蔵書、無窮会平沼文庫第二、無窮会織田文庫、国文学研究資料館中村真一郎文庫、慶大斯道安井文庫・浜野文庫等）によって、書名・書型・巻冊・編著者・刊年・序跋者等を記した目録を作成する。

C班　明治後半期より大正・昭和初期における日本漢文学の基礎的研究

日本漢文学は、明治前半期の隆盛を境に急速に衰退の路を辿るとの認識が一般的である。然るに、明治後半期より大正・昭和初期に至る空白の四十余年はまさしく日本漢文学の終焉期であり、現在に直接するにもかかわらず、その活動を正確に記録し実像を明らかにする試みは全くと言っていいほどなされていない。いま、当該期の漢詩文結社の活動の一斑を示せば、明治後半期に始まる漢文学衰退への危機感を動機とした、その振興への活動がある。たとえば、随鷗吟社（明治37年結社）を中心として、宮中に「漢詩所」を設置する働きかけがなされた。これは明治天皇の侍講元田永孚の死去（明治24年）を端緒とする漢文学衰退への危機感のなか、宮中の「御歌所」に倣って、その正当性を皇室の権威に求めようとする動きである。これらの動きは、のちに漢詩人が政界・官界・実業界と関わりを深める方向に進み、昭和初期における国策への積極的な支持という形でその絶頂を迎えるのであり、上述のような従来の評価が十分であるとはいえない。そこで本研究は、随鷗吟社などの結社活動を調査・分析することを通して、明治後半期より大正・昭和初期における日本漢文学の軌跡を明らかにすることを目的とする。

朝鮮漢文班

主任：小川 晴久
担当者：渡邊 了好

中国の影響下における日本文化成立上無視し得ない朝鮮文化について、朝鮮漢学文献目録と朝鮮儒学文献の収集、李退渓・李舜臣著作の和刻本の調査、朝鮮仏典の日本招来等を通じて研究を推進し、また日本統治時代の漢文教科書の収集も平行して実施する。

朝鮮漢学と日本

一、課題設定と趣旨

朝鮮と日本は大国中国に隣接する小国として中国の漢字文献と漢字文化を受容し、自国の学問・文化を形成・発展させてきた共通点をもつ。したがって日本漢学を解明するに当って朝鮮漢学との比較がたえず必要であり、有効である。また両国の文化・学術交流・交通（平和裏または戦争と直接支配）もあって両国の漢学に何らかの影響を与えているとすれば（主として朝鮮→日本であるが）、朝鮮漢学自体の把握・研究も重要である。その上小国同士の常として、また日本の朝鮮統治による朝鮮軽視ないし蔑視により、日本の朝鮮研究は思想・哲学分野では極度に貧弱である。5年間にわたる本プロジェクト研究では、これらのたちおくれを回復する意味でも次の三つの課題を設定する。

一つは朝鮮漢学自体の研究である。朝鮮・韓国では国学・実学とよんで今日まで相当な研究の蓄積がある。少くとも文献目録（研究文献目録も含め）の収集、主要文献の収集を予算の範囲ではかりたい。

二つめは朝鮮漢学の日本漢学への影響である。朝鮮本の流入・輸入についての調査を富山大の藤本幸夫氏が精力的に行っているが、それに学びつつ主として李退渓の文献とその和刻本の把握（『日本刻版　李退渓全集』に依拠）、壬辰倭乱による朝鮮本の流入（略奪）の把握、李舜臣の作品や柳成龍の懲毖録の和刻本とその現在所在の把握、大内氏を介した高麗大蔵経の輸入とその現所在地を調べたい。洛北高山寺の華厳縁起の研究も。三つめは朝鮮総督府編纂の漢文教科書、解放後の南北朝鮮の漢文教科書の収集である。韓国のものは膨大な数になるので、歴代の主なものを中心とする。

二、各課題とその内容

（一）朝鮮漢学の把握

（1）文献目録の収集

（2）朝鮮儒学の基本的文献の収集

（二）朝鮮漢学の日本への影響

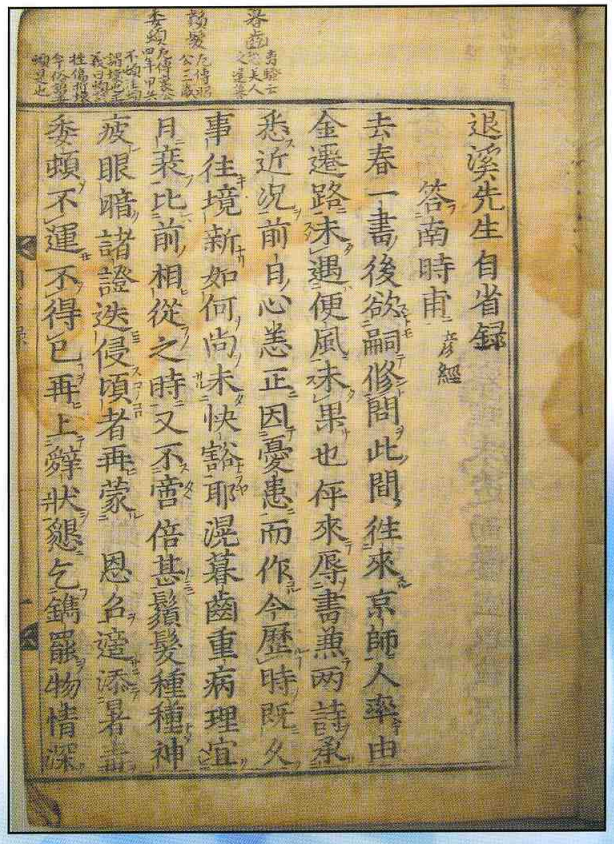
（1）華厳縁起（絵巻物）成立の背景研究

（2）高麗大蔵経の輸入と現況把握

（3）李退渓和刻本の把握

（4）李舜臣の作品と、懲毖録和刻本調査

（三）朝鮮総督府漢文教科書、南北朝鮮の漢文教科書の収集


退溪先生自省録
答南時甫 彦經
去春一書後欲嗣修問此間往來京師人率由
金遷路未遇便風未果也年來廢書兼兩詩承
悉近況前自心悉正因憂患而作今歷時既久
事往境新如何尚未快豁耶滉暮齒重病理宜
月衰比前相從之時又不啻倍甚鬚髮種種神
疲眼暗諸證迭侵頃者再蒙 恩召遣添暑書
委頓不運不得已再上辭狀懇乞鐫罷物情深

退渓先生自省録
萬治二年據萬暦十三年羅州牧刊本重刊寛文五年
京都村上平樂寺印本

漢文教育班

主任：青木 五郎

担当者：小川 晴久・吉崎 一衛・山辺 進

漢文読解能力の低下に対する本プログラムの取り組みとして、総合科目用漢文教科書と中国文学科用漢文教科書の編纂を実施して、現状の打開をはかる。また学問的取り組みとして明治以後の漢文教材の収集と変遷に関する系統的研究を実施する

漢文教材の変遷と大学教育

本班は次の二つの事業を計画している。

一、大学漢文教科書の作成

二、明治以後の漢文教科書の収集と漢文教材の変遷についての系統的研究

一、大学漢文教科書の作成

今日大学用漢文教科書としては、二、三の出版社から数種類のものが刊行されているが、そのいずれもが、特定の書物からの抜粋であったり、内容が高度で詳細に過ぎる等、必ずしも今日の学生の漢文学力に適合したものとは言い難い。現在、大学教育において、専攻学部（学科）を除くと、漢文教育がほとんど顧みられない原因の一端も、その点にあるのではないかと思われる。本班は、先ずは本学においてその先鞭をつけるべく、差しあたり次の二種類の漢文教科書の編纂を行いたいと考えている。

（1）総合科目漢文教科書（新規設置を申請する）

A.漢文（春セメスター） B.漢文（秋セメスター）

（2）中国文学科用漢文教科書

A.漢文読解法（又は、漢文基礎）―「中国文学演習①」に対応

B.中国文学演習―「中国文学演習②」に対応

C.中国思想演習―「中国文学演習③」に対応

なお将来的には、本学のカリキュラムにみられる

「中国文学史」「中国文学概論」「中国思想史」「中国思想概論」「日本漢学演習」「日本漢学史」「中国語学概論」「中国近現代文学史」

などについても、本学独自のテキストが作成されることが望ましい。

二、明治以後の漢文教科書の収集と漢文教材の変遷についての系統的研究

中国の漢字・漢文が、わが国の言語や文化の形成に果たした役割の大きさは、更めて言うまでもない。

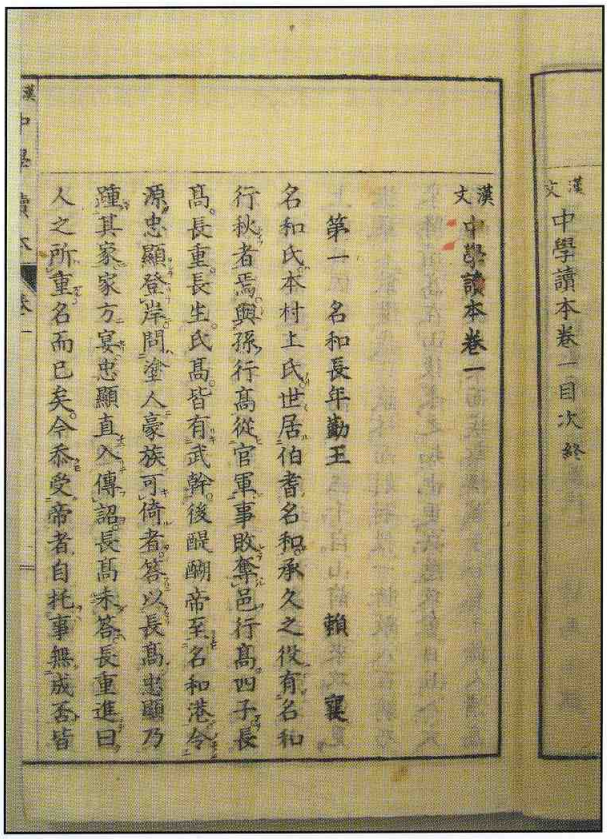
しかし明治以後の欧化政策や科学技術教育の推進は、相対的に漢文教育（人文教育）の軽視という現象をもたらした。就中、第二次大戦の敗戦を契機に、漢文教育に大きな変貌が見られるのは、周知のところである。

一方、今日、世界的には、

（1）機械文明の行きづまりと精神文明の復権

（2）グローバル化時代における東アジア漢字文化圏の役割

などが、とりざたされる中で、わが国の今後の漢字・漢文教育がいかにあるべきかについても、その指針が求められている。その問いに答えるためには、わが国の漢字・漢文教育が過去においてどのような変遷をしてきたかについての、系統的な研究が不可欠であろう。われわれは、その手始めとして、明治以後の漢文教科書を広く収集して、（1）教育目標、（2）教育内容（教材）、（3）時代性、などについて精査し、それらをふまえて今後の漢文教育の在り方について提言したい。


漢文中學讀本巻一

第一 名和長年勤王

名和氏本村上氏世居伯耆名和承久之役有名和行秋者焉與孫行高從官軍事敗奪邑行高四子長高長重長生氏高皆有武幹後醍醐帝至名和港令源忠顯登岸間塗人豪族可倚者答以長高忠顯乃踵其家家方宴忠顯直入傳詔長高未答長重進曰人之所重名而已矣今忝受帝者自托事無成否皆

漢文中學讀本
明治26年京都吉川半七刊本訂正三版

日中文化交流班

主任：佐藤 一樹

担当者：王 宝平・竹下 悦子

日本の漢学やその周辺文化を独自のものと位置づけ、その認識にたって明治期の近代学芸ジャンルの成立と漢学の関係、変革期におけるアカデミズムと古典研究、日中における近世の文献流通特に和刻本と華刻本の問題等を考察する。

日本漢文と日中文化交流

○課題の設定 ～ 日本漢学と文化交流

日本と中国との間の文化交流については、長年にわたって研究の蓄積がなされてきた。近年では中国からの成果が注目を集めている。その視角も、単純な伝播――受容という伝統的な捉え方にとどまらず、互いに触発し合う相互的な関係や、あるいは一方の変化が他方の変化に繋がる連鎖的な作用などが提起されるようになってきた。いかなる文化も、その生成や変転にとって、他からの新たな要素が決定的であることが広く認識されるようになったことが背景にあろう。一国単位の閉じられた歴史、文化史とは異なった歴史像、世界像が求められているのである。

日本の漢学やその周辺の文化を独自のものと位置づけながら、日中の文化交流を考察することは、このような研究動向に合致するものといえる。日本の漢学は、もちろん中国からの文化移入が基礎にあるが、同時に、韓国やベトナム、そして中国と肩を並べる、東アジア漢字文化のクラスターのひとつでもある。それぞれの文化クラスターをつなぐネットワークの様相の解明はまだ端緒についたばかりだが、日本漢学からの視点からみる日中文化交流は、そうしたネットワークの中で重要な意義をもつだろう。中国と同質、同等であろうとした日本の漢学は、交流のなかでその差異性が明らかとなるだろう。あるいは、異なる近代の経路をとったとされがちな日本と中国が、漢学のプリズムを通してみると、今度は意外な類似性が浮かび上がってこよう。

○研究計画

日中文化交流班の研究は、二つの分野に大別される。第一は、書籍の交流の長い歴史から日本と中国の文化的関係に新たな焦点をあて、第二は、日中双方が直面した、近代文化の形成過程における漢学との新たな関係を、考えようというものである。

1、中国における和刻本と華刻本

日本に伝来した漢籍については、これまで精細な調査、研究が重ねられてきた。近代に入ってから中国で大量に漢訳された西洋の書物についても、最近になり、多くの報告が出てきている。しかしながら、日本から中国への流れについては、遣唐使、あるいは中世の留学僧から近代の留学生まで「ヒト」についてはよく知られているものの、書物についてはそうした流れがあったことすら十分認知されていない。王宝平教授は日本で刊行された漢籍（和刻本）の中国の所在状況を網羅的に調査し、目録・データベースを作成することを計画している。これには中国各地の図書館の協力が欠かせないが、すでに『中国館蔵和刻本漢籍書目』（1995）、『中国館蔵日人漢文書目』（1997）を編纂した経験をもつ教授は、各図書館と特別な関係を構築しており、協力が期待できる。

華刻本というのは、研究協力者の王勇教授が提唱する新たな概念で、中国で翻刻された日本の漢籍を指すものである。叢書の目録からのリストアップと図書館での実地調査により、その全容を明らかにし、同時にそれらの内容を精査して、「華刻」されたいきさつや背景を考察していく。

2、漢学と近代学術概念の比較

人文、社会、自然各分野において、西洋からの新たな学知を移入する際、漢学がその概念の理解の基礎にあったことは広く知られている。ただ翻訳語の選定や創出についての研究は、文学、歴史、言語の各分野の研究者が取り組んではいるものの、漢学にもとづく伝統的な学術概念と西洋近代の学術概念との接点や裂け目については、考察すべき課題が山積している。竹下悦子教授は、1920、30年代に西洋の学術的手法を受け入れた中国の学者が、自国の漢学とどう向かったかを、古代学に焦点をしぼって探究し、現在まで受け継がれている漢学概念の成立の一例を示す計画である。佐藤は、発足当初の東京大学に教鞭を執った重野安繹や川田剛などの漢学者を中心に、彼らが自らもつ漢学の知識を歴史学や文学といった新たな学問範疇に変換しようとした軌跡を追い、近代社会、とりわけ近代の知的社会における漢学の位置づけを探っていく。竹下、佐藤それぞれの研究を総合することで、日中両国の近代における漢学の差異と連関が明らかにできよう。

書誌学目録データ班

主任：高山 節也

担当者：町 泉寿郎・谷本 玲大

日本漢文学関連文献データベースの構築及びデータの集積を中心とし、個別事業としては、和刻本漢籍・準漢籍における邦人序跋集成の編纂、江戸明治期漢詩文集や江戸漢学者著述等の目録や関連論文目録の作成を目指す。

日本漢文文献と情報

1 本プログラムにおいて、もっとも基礎的な活動内容として、海外をも含めた該当書籍調査とそのデータ蓄積があげられる。本プログラムのテーマが「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」であることから、調査対象となる文献は日本漢文文献・和刻本漢籍・準漢籍にしぼられるが、これらを全国あるいは海外における収蔵機関における目録から抽出し、どこにどのような該当文献が存在するかを一目瞭然たるかたちで、情報提供することが目的である。まずは収蔵機関における目録の収集から始めて、逐次データベースへの入力を行う予定である。特にこの作業に関しては、町泉寿郎（本学講師）谷本玲大（推進担当者・本学講師）會谷佳光（COE研究員）等の協力をうける。町は医学書を、會谷は仏典を担当して対象文献の網羅性を実現する。また谷本は、国内国外に向けて情報発信を行うべく、拠点リーダーを中心として、他の推進担当者と有機的な連携をとり、本COEプログラム事業の中心的部分をなす上記データベース事業において、データベース化とデータの蓄積事業や、それら蓄積を取りまとめた公開作業について、技術的助言などの協力に任じる。また各班がおこなう研究活動のうち、データベース化を志向する成果についての援助や技術開発、その他データベース関連事業へも協力をおこなう。

2 また調査対象となる和刻本漢籍・準漢籍については、邦人による訓点はもとより注釈や校訂さらには邦人の序跋等が附されているものが一般であり、ここには邦人の学問の系統や当時の思潮が十全に反映されている。にもかかわらず個々の文献におけるこれら邦人の関与については、特に著名な漢学者を除外して殆ど顧みられていないのが現状である。これに鑑みて、特に個々の書籍出版に関する事情や学問の師承関係、あるいは当時の出版の傾向などを如実に語る邦人の序跋を集成して、近世文化や思潮研究の資料を提供することを計画した。具体的には江戸期より明治初年にいたる和刻本漢籍・準漢籍を対象とし、これらを四部に分類し、個々の書物の簡単な書誌を提示し、序跋を景印あるいは活版で提示する。さらに書名索引・人名索引を附して検索の便を計る。

3 一方、中国から西洋への舵の切り替えは早く江戸後期に始まり、江戸と明治はその文化的継承の次元で、政治的な断絶では律しえない種々の接点を秘めている。その多様な接点を、漢学に着目することにより、とりわけ洋学導入の中心地たる東京大学において漢学が担った意義を同時代における漢学の意義の典型と位置付けて、学的な継承と断絶を具体化し、江戸と明治の接点における漢学の意義を特化する。

またそれに関連して、江戸から明治にかけて製作された日本人による漢詩文集は膨大な数に上ると見られることから、基礎作業として、この分野における主要コレクションによって、書名・書型・巻册・編著者・刊年・序跋者等を記した目録を作成する。

さらに、本プロジェクトが構想する日本漢文学資料データベースは、世界中に現存する日本漢文学資料のすべてを対象とする大規模なものであり、入力データが増大するにつれて、著者別索引・分類検索・出版者別索引などの、さまざまなデータ利用の展開が期待できる。それらの基本資料として日本漢文学関連文献総目録の作成が必然であろうが、特に江戸期漢学者の著述聡目録の作成を目指す。

また日本漢文学関連のこれまでの学問上の成果（単行本・論文等）をも本プロジェクトが集成して、その情報を発信することも本拠点の任務であり、積極的に推進する予定である。以上3の活動は町が中心となって推進する。

研究員研究テーマ

COE研究員：會谷 佳光

我が国出版文化の濫觴でもある漢訳仏典について、特に多量な出版物があるにもかかわらず整理および目録化のなされていない近世における和刻本仏典の総合調査、および我が国における仏典の伝来状況の究明を目指す。

「日本における仏典の伝入と出版に関する研究」

私はこれまで中国宋代に編纂された書籍目録の分析を通して、当時の書籍の流伝状況の解明につとめてきた。その際、『新唐書』芸文志の釈氏類を主たる考察対象とし、その原資料の解明に一定の成果を挙げた（『宋代書籍聚散考　新唐書芸文志釈氏類の研究』、汲古書院刊）。その経験を活かし、COE研究員として、日本で編まれた仏典関係の目録を活用して、日本における仏典の伝入状況を究明するとともに、こうして伝入された仏典にもとづいて日本で出版された仏典、所謂和刻本仏典の総合的な調査・研究を計画している。

日本で編まれた仏典関係の目録には、中国への留学僧が持ち帰った書籍や物品を記した所謂将来目録、日本の仏教諸宗派の仏典目録、寛平年間の宮中の蔵書状況を伝える藤原佐世の『日本国見在書目録』がある。また参考として、日本の仏典の主要な伝入ルートである高麗の僧義天が編んだ『新編諸宗教蔵総録』がある。これらの目録によって、日本への仏典の伝入状況の大筋を把握しておくことは、日本仏教史研究にとっての基礎的研究となるばかりでなく、和刻本仏典の来歴を考える上でも極めて重要である。

和刻本漢籍を専門に扱った分類目録としては、長澤規矩也『和刻本漢籍分類目録』・同『補正』（汲古書院刊）がつとに知られているが、同書には仏典が含まれていない。その理由について、同書の凡例は、仏典の利用者層がその他の漢籍のそれと異なるために、はじめから仏典を調査対象としなかったと説明する。しかしながら、日本の印刷文化は、その当初から仏典の印刷とともに発展してきたものであり、これを調査・研究することなくして、その全体像の把握は到底不可能である。

そもそも中国・日本・韓国を問わず、現存最古の印刷物はいずれも仏典であり、所謂摺経供養などの宗教的な目的で、初期の印刷術が活用されていたことが確認されている。特に日本では、書物の出版はながらく仏教文化に依存して発展してきた。奈良時代の百万塔陀羅尼をはじめ、平安時代も摺経供養の目的で出版が行われ、その影響下で、平安時代末葉以降、奈良の興福寺や、高野山、京都の諸寺院で仏典の開版が盛んに行われるようになった。また鎌倉時代から盛んになった禅宗は新興の武家政権と結びつき、その勢力を拡大し、京都・鎌倉の五山を中心に数多くの宋元版の覆刻を行った。これが著名な五山版だが、その中心はやはり禅籍をはじめとする仏典であった。仏典以外の漢籍、所謂外典の出版は、この五山版の全盛期、南北朝時代にようやくはじまったものである。ところが、江戸時代になって世の中が平和になると、識字層の増大や印刷術の進歩等により、書林による営利出版の条件が整い、仏典に限定されず、あらゆる種類の書物が出版されるようになった。しかし、出版物の種類や量が増えたといっても、やはり仏典がその主流であったことには変わりない。また、たとえ江戸時代の刊本であっても、そのなかには宋元版や明版に由来するものや、伝来の写本や五山版等に附された名僧の書き入れを取り込んだものもあろうから、近世のものだからといって、一概にその資料的価値を軽視するべきではない。

以上のごとく、日本の印刷文化はもとより、日本文化を研究する上で、和刻本仏典が非常に重要となってくることは容易に想像されるところである。ところが、これまでの和刻本仏典の調査・研究の状況をふり返ると、五山版や古活字版は貴重書ゆえに研究成果の蓄積が見られるが、こと江戸時代のものに関しては、個別的な版本研究はあるにしろ、総合的な調査・研究がこれまで十分に行われてこなかった。このような現況において、本研究計画は、この和刻本仏典に対し、はじめて総合的な調査・研究を試みるものであり、日本の印刷文化史を考える上でも非常に意義深い研究であると考える。

研究員研究テーマ

COE研究員：清水 信子

近世における漢学の受容を、文物の流通や社会背景を通じて考慮する場合、地方における漢学関連文献の調査研究が欠かせない。その一端として、太田錦城を師とし信濃を拠点とした、伊藤鹿里に関わる文献の調査と研究を実施する。

伊藤鹿里旧蔵漢学資料の整理と研究　―大田錦城未刊資料を中心として―

近世日本における漢学の受容、延いては日中学術交流の歴史、動向、背景等を解明するにあたっては、漢学者をはじめとした知識人旧蔵の各種典籍、また各人の学問の軌跡が知られる筆記類等旧蔵資料を調査することがその端緒であり、またそれは必要不可欠でもあろう。その場合、江戸、京都、大阪といった都市在住知識層はもとより、とりわけ地方を拠点とした知識層の旧蔵資料の調査が重要である。それは、当時の流通や交通といった社会状況から見て各地方に残存する各種の文献は、その文献の広範な受容を示唆するものだからである。そこで今回、その一端として、近世後期、郷里信濃を拠点とした漢学者伊藤鹿里について、刊行された文献の他、数多くの講義筆記等鈔本を含む旧蔵資料、中でもその師、大田錦城関係資料について調査、整理していきたい。

伊藤鹿里（名祐義、字忠岱、号鹿里・潜龍斎・仰継堂）は、安永七（1778）年、信濃・春日村（現長野県北佐久郡望月町春日）に生まれ、家業（呉服商）の傍ら京都に出で吉益南涯に入門し医学を、次いで江戸に出で、日本において考証学を提唱した嚆矢として知られる大田錦城に入門し儒学を学んだ。それらにより漢蘭折衷医学及び考証学に通じ、自身の著作も医学と儒学の両面に亙り、『刺絡聞見録』（文化十四年刊）、『傷寒論張義定本』（文政元年刊）、『孝経国字解』（文化十四年刊）、『大学国字解』（天保七年刊）等いくつか刊行されている。

現在、玄孫伊藤祐俊氏宅（長野・望月町春日）に管理される鹿里の旧蔵書は約600部1000冊以上に上り、大別すれば医学・儒学を主とした漢籍、及びそれに関連する準漢籍等漢学資料、また軍談等雑多な国書となっている。漢学資料には、鹿里筆記による師吉益南涯、大田錦城の講義録が大量に含まれ、中でも錦城はじめ晴軒（錦城三男）、晩成（錦城四男）の講義を筆記した「聞書」「記聞」類は、資料的価値から見て日本漢学において注目されよう。

大田錦城（名元貞、字公幹・才左、号錦城）は、明和二（1765）年加賀に生まれ、皆川淇園、山本北山に折衷学を学んだが、後、清朝考証学を受け日本においても考証学派を起こした。その実証的な学風は、海保漁村・島田重礼等により明治期以降も受け継がれており、近世から近代にかけての日本漢学を語る上で重要な人物と言えよう。錦城の著作は多いが、そのほとんどが未刊で『国書総目録』にも著録されていないものも多いため、これまで本蔵書所蔵鹿里講義筆記についても研究者に寓目されることも少なく、本格的に調査されることも無かった。しかし当然ながら、その本格的研究には未刊資料の調査は必須であり、そのためにも書誌的整理が先決であろう。

これら錦城関係資料を含む本蔵書については、伊藤伯太記『仰継堂蔵書目録』があり、またそれについては鹿里について研究されている青木歳幸氏により加筆・整理され公表（同氏『在村蘭学の研究』所載）されているため書名等蔵書の全容は概観される。しかし実際の配架状況は未整理のため、閲覧に際しては目的の文献を得ることは容易ではない状態にあり、その詳細は正確には知れない。そこで本蔵書を詳細に調査・整理し、目録及び解題を作成していくが、まず漢学資料から鹿里筆記各種講義録をはじめとした大田錦城関係資料、またそこから派生して鹿里自身の著作を中心として着手していきたい。そしてその後、蔵書全体も詳細に調査・整理し、各資料及びそこから窺知される近世日本における漢学界の動向等について総合的に研究していきたい。

研究担当者等

研究担当者

担　当	氏　名	所　属	職　名	専門分野	研究担当班
代　表	石川 忠久	学長			
総括責任者	佐藤 保	中国学専攻	教授	中国古典文学	総括
拠点リーダー	高山 節也	東アジア学術総合研究所	教授	漢籍書誌学	総括　書誌学目録データ
担当者	白藤 禮幸	国文学専攻	教授	国語史	上代・中古漢文 日本漢字音・字書・辞書
	山崎 正伸	国文学専攻	教授	平安朝文学	上代・中古漢文
	磯 水絵	国文学専攻	教授	日本音楽史学	中世漢文
	青木 五郎	中国学専攻	教授	漢文教育	漢文教育
	竹下 悦子	中国学専攻	教授	中国中世文学	日中文化交流
	小川 晴久	中国学専攻	教授	朝鮮儒学史	朝鮮漢文　漢文教育
	渡邉 了好	中国学専攻	教授	日韓比較文学	朝鮮漢文
	横須賀 司久	中国文学科	教授	日本漢学	近世近代漢文
	吉崎　一衛	中国文学科	教授	日中比較文学	漢文教育
	王 宝 平	中国学専攻	特任教授	中日比較文学	日中文化交流
	佐藤 一樹	国際政治経済学専攻	教授	日中比較文化史	日中文化交流
	町 泉寿郎	東アジア学術総合研究所	専任講師	日本漢学	近世近代漢文　書誌学目録データ
	吉原 浩人	国文学専攻	非常勤講師	日本漢文学	上代・中古漢文
	谷本 玲大	国文学科	非常勤講師	和漢比較文学	上代・中古漢文　書誌学目録データ　日本漢字音字書・辞書
	田中 幸江	国文学科	非常勤講師	中世文学	中世漢文
	大島 晃	中国学専攻	非常勤講師	日本漢学	近世近代漢文
	佐藤 進	中国学専攻	非常勤講師	中国語学	日本漢字音・字書・辞書
	山辺 進	中国文学科	非常勤講師	中国思想史	近世近代漢文　漢文教育

客員研究員

氏　名	所　属	専門分野
石塚 晴通	北海道大学教授	国語学・文字・敦煌学

COE研究員

氏　名	専門分野
會谷 佳光	漢籍書誌学
清水 信子	漢籍書誌学

COE研究助手

氏　名	所　属　等
相原 健右	博士課程・後期・3年
飯沼 果奈	博士課程・後期・3年
木村 淳	博士課程・後期・3年
川辺 雄大	博士課程・後期・2年
藤田 智章	博士課程・後期・2年

学外研究協力者

研　究　分　担	氏　名	所　属　等
上古・中古漢文	河野 貴美子	早稲田大学　文学学術院　専任講師
中世漢文	福島 和夫	上野学園大学　教授
近世・近代漢文	ロバート・キャンベル	東京大学　大学院総合文化研究科　助教授
漢文教育	宮内 保	文教大学 文学部　教授
漢文教育	小金澤 豊	埼玉県八潮市立潮止中学校　教諭
日本漢字音・辞書・字書	大島 正二	本学　客員教授
日本漢字音・辞書・字書	小方 伴子	東京都立大学 人文学部　文学科中国文学専攻　助手
日中文化交流	陳 捷	国文学研究資料館　文学資源研究系　助教授
書誌学目録データ	高橋 智	慶応義塾大学附属研究所　斯道文庫　助教授
書誌学目録データ	真柳 誠	茨城大学　人文学部 教授
書誌学目録データ	小曽戸 洋	北里研究所　東洋医学総合研究所　医史学研究部長
総括班	戸川 芳郎	財）東方学会　理事長　東京大学　名誉教授

寄贈資料一覧

（平成16年7月～11月）

一般書籍

タイトル	発行所（発行年）
黄俊傑著『東亜儒学史的新視野』	台湾大学出版中心(2004.6)
黄俊傑編『中国経典詮釈伝統(一)』	台湾大学出版中心(2004.6)
李明輝編『中国経典詮釈伝統(二)』	台湾大学出版中心(2004.6)
楊儒賓編『中国経典詮釈伝統(三)』	台湾大学出版中心(2004.6)
張宝三・楊儒賓編『日本漢学研究初探』	台湾大学出版中心(2004.6)
鄭吉雄著『易図象与易詮釈』	台湾大学出版中心(2004.6)
甘懐真著『皇権、礼儀与経典詮釈』	台湾大学出版中心(2004.6)
高明士著『東亜古代的政治与教育』	台湾大学出版中心(2004.6)
張崑将著『徳川日本「忠」「孝」概念的形成与発展』	台湾大学出版中心(2004.6)
李明輝編『儒家経典詮釈方法』	台湾大学出版中心(2004.6)
子安宣邦著 陳瑋芬訳『東亜儒学:批判与方法』	台湾大学出版中心(2004.6)
『資料集　神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科10年の歩み』	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科(2004.3)
『東アジアに新しい「本の道」をつくる』	トランスアート(2004.3)
『デジタルアーカイブ白書2004』	トランスアート(2004.3)

目録

タイトル	発行所（発行年）
『明教館・松山藩学校漢籍目録』	愛媛県立図書館(2000.11)
『楽地園文庫目録』	愛媛県立図書館(2002.3)
『堺市立中央図書館蔵和漢書目録』	堺市立中央図書館(1986.4)
『九州大学附属図書館教養部分館漢籍目録』	九州大学附属図書館教養部分館(1971.3)
『三重県立図書館所蔵国書漢籍蔵書目録』	三重県立図書館(1995.3)
『津市図書館蔵有造館文庫目録』	津市図書館(2004.3)
『津市図書館蔵橋本文庫目録』	津市図書館(1991.3)
『津市図書館漢籍目録』	津市図書館(1995.12)
『津市図書館蔵稲垣文庫仮目録』	津市図書館(2001.3)
『津市図書館蔵井田文庫目録』	津市図書館(2000.3)
『個人文庫総合目録ー特別資料ー』	熊本市立図書館(1995)
『武藤文庫目録(ハロン庫)』	熊本市立図書館(1987.2)
『琉球大学附属図書館蔵大濱晧遺贈図書漢籍目録(稿)』	琉球大学図書館
『法政大学図書館蔵漢籍分類目録(1995年度末迄データ作成済分)』	法政大学図書館(1996.11)
『神宮文庫図書目録』	汲古書院(1973.11)
東洋文庫東洋学インフォメーションセンター編 『増訂　日本における漢籍の蒐集ー漢籍関係目録集成ー』	汲古書院(1982.5)
『新潟県立新潟図書館所蔵漢籍目録』	新潟県立図書館(1979.3)
『大東急記念文庫書目』	大東急記念文庫(1955.8)
『八戸市立図書館漢籍分類目録』	八戸市立図書館(1977.3)
『中央研究院歴史語言研究所善本書目』	中央研究院歴史語言研究所(1968.6)
『国立故宮博物院普通舊籍目録』	国立故宮博物院(1970.5)
『国立台湾大学台湾省立台北図書館国防研究院国立台湾師範大学 私立東海大学善本書目』	国立台湾大学等(1968.8)
『国立故宮博物院善本舊籍総目』	国立故宮博物院(1983.4)

紀要

タイトル	発行所（発行年）
『中国古籍文化研究』第一号	早稲田大学　中国古籍文化研究所（2003.12）
『中国古籍文化研究』第二号	早稲田大学　中国古籍文化研究所（2004.10）
裘錫圭著 早稲田大学古籍文化研究所説唱文学研究班訳 『烏金寶卷　景印・翻字・注釈』（『中国古籍文化研究』単刊1）	早稲田大学　中国古籍文化研究所（2003.12）
裘錫圭著 早稲田大学古籍文化研究所文字学研究班訳 『文字学概要－〔前編〕漢字の誕生とその発展－』（『中国古籍文化研究』単刊2）	早稲田大学　中国古籍文化研究所（2004.1）
古屋昭弘・氷上正・王福堂共編『梅花戒寶卷 影字・翻字・注釈』 （『中国古籍文化研究』単刊3）	早稲田大学　中国古籍文化研究所（2004.10）
『台大日本語文研究』第六期　日本漢学研究専輯	国立台湾大学日本語文学系（2004.6）
『国立台湾大学東亜文明研究中心通訊』創刊号	台湾大学東亜文明研究中心（2003.10）
『国立台湾大学東亜文明研究中心通訊』第二期	台湾大学東亜文明研究中心（2004.1）
『国立台湾大学東亜文明研究中心通訊』第三期	台湾大学東亜文明研究中心（2004.4）
『国立台湾大学東亜文明研究中心通訊』第四期	台湾大学東亜文明研究中心（2004.7）
『国立台湾大学東亜文明研究中心通訊』第五期	台湾大学東亜文明研究中心（2004.10）
『Taiwan Journal of East Asian Studies』Volume 1 Number 1	台湾大学東亜文明研究中心（2004.6）

報告書

タイトル	発行所（発行年）
『漢文古版本とその受容（訓読）』	国際ワークショップ　科学研究費特定研究（A） （2）東アジア出版文化の研究（2001.8）
『日本に於ける漢字字体規範成立の実証的研究』〔課題番号12410109〕 （平成12年度～平成13年度 科学研究費補助金基盤研究（B）（2）研究成果報告書）	北海道大学大学院文学研究科（2002.3）
『日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開』	北海道大学大学院文学研究科 「日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開」事務局（2004.3）
『東アジアの印刷史から見た日本印刷文化の起源』〔課題番号13021201〕 （平成13年度～平成14年度 科学研究費補助金基盤研究（A）（2）研究成果報告書）	北海道大学大学院文学研究科（2003.3）
『大阪市立大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム 「都市文化創造のための人文科学的研究」 ハンブルク・サブセンター開設記念共同研究会報告書』	大阪市立大学大学院文学研究科 都市文化研究センター（2003.10）
『法政大学国際日本学研究所研究報告』第2集	法政大学国際日本学研究所（2003.9）
『国際日本学』第1号	法政大学国際日本学研究所（2003.10）
『「書体・組版ワークショップ」報告書』	京都大学人文科学研究所（2004.2）
『オープン・フォーラム「漢字文化の今」報告書』	京都大学人文科学研究所（2004.7）
『公開ワークショップ：「唐代ナリッジベースの可能性」報告書』	京都大学人文科学研究所（2004.7）
『特別講演会「中國における書物の伝統」報告書』	京都大学人文科学研究所（2004.7）

雑誌その他

タイトル	発行所（発行年）
『明日の東洋学』 （東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター第12号）	東京大学東洋文化研究所附属 東洋学研究情報センター（2004.10）
『季刊　本とコンピュータ』2004夏号	トランスアート（2004.6）

※ご寄贈いただき感謝申し上げます。

活動・会議一覧

（平成16年7月～11月）

講演会

■公開講演会

開　催　日	講　師	所　属	演　題
第1回 16.11.27	徐 興 慶	台湾大学・教授	台湾における日本漢文学の現状と課題

■テーブルスピーチ

開　催　日	講　師	所　属	演　題
第1回 16.10.14	藤原 克己	東京大学・教授	日本の漢文学
第2回 16.11.25	徐 興 慶	台湾大学・教授	台湾におけるCOE

現地調査

■海外調査等

氏　名	期　間	行き先	主な調査機関
石川 忠久	16.08.17～16.08.20	中国	北京図書館
青木 五郎	16.08.15～16.08.20	中国	北京図書館
王 宝 平	16.07.28～16.08.24	中国	国家図書館
王 宝 平	16.09.05～16.09.26	中国	上海図書館
高山 節也	16.09.02～16.09.10	中国	杭州図書館
町 泉寿郎	16.09.02～16.09.10	中国	杭州図書館
町 泉寿郎	16.11.14～16.11.18	中国	南京図書館

■国内調査等

氏　名	期　間	行き先	主な調査機関
白藤 禮幸	16.09.06～16.09.08	青森県	八戸市立図書館
高山 節也	16.11.06	京都府	京都大学
町 泉寿郎	16.11.06	京都府	京都大学
町 泉寿郎	16.11.18.～16.11.21	秋田県	秋田市立図書館

諸会議

■推進委員会

第1回	16.09.15
第2回	16.09.22
第3回	16.10.20

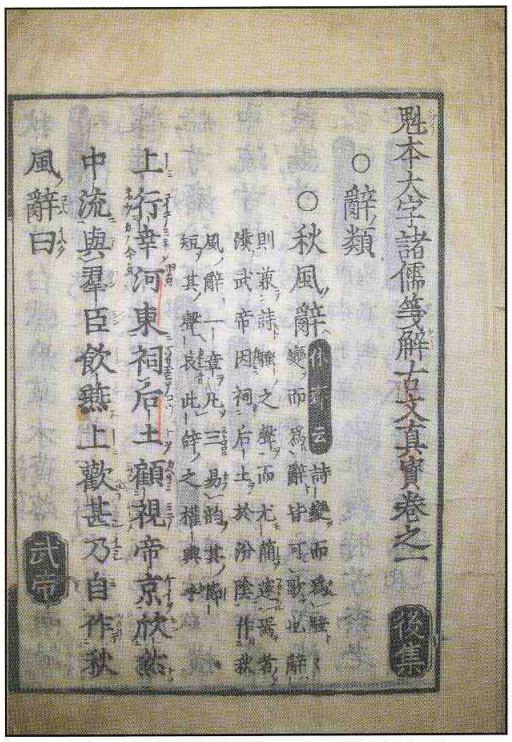
■事業推進担当者会議

第1回	16.07.21
第2回	16.09.13
第3回	16.10.14
第4回	16.11.25

■実施委員会

第1回	16.07.20	第8回	16.10.13
第2回	16.08.02	第9回	16.10.19
第3回	16.08.17	第10回	16.10.26
第4回	16.08.23	第11回	16.11.04
第5回	16.09.11	第12回	16.11.11
第6回	16.09.22	第13回	16.11.17
第7回	16.09.30	第14回	16.11.24

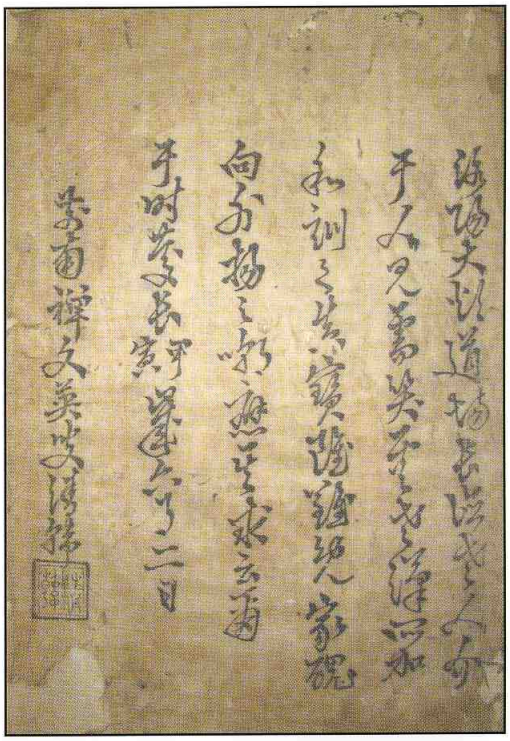
和刻本古文真宝書影集1


魁本大字諸儒箋解古文真寶卷之一　後集

○辭類

○秋風辭

上行幸河東祠后土顧視帝京欣然中流與羣臣飲燕上歡甚乃自作秋風辭曰



魁本大字諸儒箋解古文眞寶後集　江戸初期刊本

清韓の跋があることから清韓本とも呼ばれるが、
跋の年代の慶長甲寅をそのまま出版年次として採用するのはためらわれる。

編集後記

「雙松通訊（そうしょうつうじん）」創刊号を発刊する。COE採択より今に至るまで、嵐のような半年であった。今後の研究・教育活動の基礎づくりと、学内外の人材との多様な人脈づくり、シンポジウムや公開講座の開講などを通じて、着実な一歩を踏みだせたものと思う。
本号ではメンバーの研究活動を中心に本学COEの目的や方法などを紹介した。小規模大学ののCOEではあるが抱負は大きい。学内外からの助言や、積極的な協力を今後大いに期待している。（T）

明治35年鈐印
「趙氏摹古印存」より

雙松通訊 創刊號

発行日
平成16年12月31日

編集・発行
二松學舍大学　21世紀COEプログラム 実施委員会

〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16
TEL：03-3261-3535　FAX：03-3261-3536

e-mail：coejimu@nishogakusha-u.ac.jp
URL：http://www.nishogakusha-coe.net/